論文

資本制的生産様式における「労働疎外」の考究（一）

水谷謙治

はしがき
第一章　初期「労働疎外」論の概観
第二章　資本制的生産様式における「労働の疎外」
　序　節　『資本論』とその諸草稿における「労働疎外」の規定
　第一節　商品生産における「労働疎外」の可能性
　第二節　「労働疎外」の現実的諸過程
　第三節　本章の総括
第三章　初期「労働疎外」論と『資本論』との関連

はしがき

現代資本主義における富と生産力の発展は画期的なものといえるが、これに随伴して深刻化する諸矛盾の新たな展

開もまたきわだったものがある。昨今、一方でムード的な「左右」からの「疎外論」が流行するかと思えば、他方で「生活の向上」からマルクスの「窮乏化」に関する諸命題を否定する主張がみられるのは、こうした資本主義的発展の二面を反映するものといえよう。

ところで、一口に「疎外論」といっても多様な種類がある。たとえば、「疎外」を「工業化」とか「大衆化状況」とか組織などにともなう現象としてとらえてその歴史的階級的本質を隠蔽するもの、マルクスの初期「労働疎外」論をヒューマニズム論として称揚しここに「疎外論」の最高の典拠を求めるもの（「初期マルクスへの復帰」を呼びかけるもの）、あるいは、初期「労働疎外」論を「哲学的イデー」、『資本論』をその「実現」としてとらえつつ「スターリニズム的疎外」からの回復を説くもの、その他等々である。また、いわゆる「窮乏化」法則を否定する議論のばあいには、この問題に関する『資本論』の分析を無視したり歪曲したりして労働者階級の「窮乏化」を否定し、労働者階級の現実の「窮乏」を「疎外」という言葉だけでムード的に曖昧化してしまうやりかたが多いようである（もっとも、マルクス経済学の内部においても、「窮乏化」と「労働疎外」とを結びつけてとらえようとするマルクス経済学者の諸研究をすべて無差別に、初期「労働疎外」論への後退であるとか、問題を「哲学的次元」へ還元させるものだとして否定してしまう一面的傾向がみられる）。

したがって、これらの見解を吟味し批判することが、マルクス経済学の分野での重要な一課題になっている。しかし、この分野において、『資本論』を中心として「労働の疎外」、労働者階級の「窮乏化」ということの意味自体や双方の関連をその拡がりと深みにおいて正確にとらえる作業はまだ十分とはいえない。『資本論』と初期「労働疎外」論[1]との関連についても同様である。

また、現代の資本主義諸国や社会主義諸国の動向をみるならば、資本主義的生産様式と共産主義的生産様式およびその過渡期における人間的労働のありかたを、労働主体の立場から科学的に解明することが、プロレタリアートの全面的解放のための理論的課題として、最も緊要なものの一つになっていることがわかる。

それゆえ本稿では、以上の諸課題を遂行する作業の一環として、ないしはその手掛りをうるために、労働主体の側からする資本制的生産様式における人間的労働のありかた[2]あるいは「労働の疎外」という視角から、『資本論』およびその諸草稿を掘り下げつつ、初期の「労働疎外」論と『資本論』との関連を考究する。

とはいえ、右の作業を完全におこなうためには、初期から『資本論』にいたる全諸労作の全面的研究が必要になるが、これは本稿のよくなしうるところではない。したがってここでは、初期『経済学・哲学草稿』[3]と『資本論』（およびその諸草稿）に焦点を絞ることにし、また前者後者ともに、それぞれの章でのべてあるような限定を加えてこれを考究することにする。

なお、第一章で初期「労働疎外」論を概観したのち、第二章ではその後の諸労作の検討をとびこえて『資本論』とその諸草稿の検討をおこない、双方の関連については第三章で考察することにした（両者のあいだに横たわる主要労作についてのごく簡単な考察もここにふくまれる）。『経・哲草稿』ののち、それに直続する重要な諸労作を順次とりあげてから『資本論』を検討する叙述構成も考えたが、それだと多少とも結論を先き取りすることになるし、また最も発展したものをあらかじめ理解しておく方がよいと考えたからである。

（1）初期「労働疎外」論とは、『経済学・哲学草稿』（一八四四年）の一断片「疎外された労働」を中核とした「労働の疎外」に関する諸論述のことである。以下では、右の断片のほかに『経・哲草稿』の他の諸断片やほぼ同期に記された『経済学の抜

粋ノート』における当該諸論及もその範囲にふくめて検討する。

(2) 「人間的労働のありかた」という視点は、山本二三丸氏の論文「人間的労働の経済学的考察」（『立教経済学研究』第十三巻第四号〝はしがき〟）に示されており、本稿の右の視点もこれに啓発されたところが大きい。

(3) "Ökonomisch-Philosophische Manuskripte" 1844, Bücher eides Marxismus-Leninismus Band・41-42, Dietz. Verlag, 1955,『経済学・哲学草稿』（城塚、田中訳〈岩波文庫〉。ここでは右の訳を用いてあるが、「私有財産」と訳出されている "Privateigentum" は、場合に応じて「私的所有」とかえてある。「私有財産」の方が語感として適切に感じられる場合もあるが、マルクスに限らず古典派経済学もそれの実体を労働としてとらえ、単に人間の外部にある物としてとらえていないという事実からも右のように訳出した方が妥当と思われる場合があるからである。また適宜、国民文庫の藤野訳をも参考にした）。

第一章　初期「労働疎外」論の概観

一

周知のように、「労働の疎外」に関する初期の把握が最も集中的に示されているのは、『経済学・哲学草稿』である。それゆえ、当面の課題を考究するにはなによりもまず、この『草稿』における「労働疎外」論をごく簡単にでもみておく必要がある。だが、ことはそれほど簡単ではない。たとえば、ドイツ古典哲学における「疎外」概念の意義とマルクスによるその批判的摂取に関する理解自体が困難だし、時として「過渡的」で「未分化」な特徴をもつ初期の概念の理解も容易ではない。『草稿』に関する全研究をあげるならそれが無数といえるほど膨大な分量に達するであろうことも、これを如実に示している。ここでは、ささやかではあるが、いままでに獲得しえた限りでのこうした研究成果をふまえつつ、①視角を出来る限り経済学的側面に限定し、②主としてその積極的諸側面を前面におしだし、③『資本論』との主要な関連をたどるのに最低限必要と思われる内容だけを簡単に概括することにしたい。

一八四三年、マルクスは二つの論文『ユダヤ人問題によせて』、『ヘーゲル法哲学批判序説』を書き、そこで要旨、つぎのような見解をうちだしている。

ユダヤ教の現実的基礎は「市民社会」であり、そこでは貨幣を神とするエゴイズムが原理になっている。「貨幣は人間の労働……が人間から疎外されたものであって、この疎外されたものが人間を支配し、人間はこれを礼拝する」[4]。だから、「市民社会」内部のユダヤ人の政治的解放（公民権の獲得等）によっては、彼らの真の解放、「一般的な人間的解放」は達成されない。「市民社会」そのものの変革は、プロレタリアートによっておこなわれねばならぬ、けだし、彼らこそ「人間の自己疎外」を一身に体現しているからである。

（4）"Zur Judenfrage" M.E. Werke, Band. 1, Dietz. 1961, S.357, 邦訳〈大月書店〉、『マルクス・エンゲルス全集』、第一巻、P.411, 以下で右全集からの引用のさい邦訳はすべてここからのものとする）。

さらに同年、マルクスは、「法的、国家的諸形態は人間精神の一般的発展からは理解しえず物質的生活諸関係に根ざしているものとして理解せねばならない、したがって物質的生活関係の総体である『市民社会』の解剖学は、これを経済学のうちに求めるべきである」[5]という結論に達し、パリに移住してその研究に没頭する（一八四三年十月）。『経済学・哲学草稿』は、この年から翌年にかけてのいわゆるパリ時代の研究成果である。

（5）『経済学批判序言』(M.E. Werke, B.13, S.8, 訳、P.6)。

この『草稿』の序文には、叙述の経緯、意図、対象の扱い方がつぎのようにのべられている。

「すでに私は『独仏年誌』のなかで、ヘーゲル法哲学批判というかたちで、法律学および国家学の批判をおこなうことを予告しておいた。……その仕上げをすすめているうちに、「ヘーゲル法哲学という」思弁にたいしてだけ向け

られている批判と、その〔ヘーゲル法哲学がとりあっかっている〕種々の素材そのものの批判とを混ぜあわすことは、まったく不適当であり、〔議論の〕展開をさまたげ、理解を困難にするものだということが明らかとなった。そのうえまた、とりあつかわれるべき主題は盛り沢山であり、種類を異にするものであるから、それを一冊の本に無理にまとめる……」のは当をえない。「それゆえ私は、べつべつの独立したパンフレットで、法律、道徳、政治などの批判をつぎつぎにおこない、そして最終的に、一つの特別の著作のなかで、ふたたび全体の関連や個々の諸部分の関係をつけ、最後にあの素材の〔ヘーゲルによる〕思弁的なとりあつかいにたいする批判を加えるよう試みるつもりである。こういう理由から、本書では、国家、法律、道徳、市民生活などの国民経済との関連については、ただ国民経済学それ自身が職務上からこれらの対象に触れている範囲だけしか触れられていないことに気づかれるであろう。……私の諸結論が、国民経済学への良心的な批判的研究にもとづく、まったく経験的な分析によってえられたものだということを、最初に断言しておく……」（『経・哲草稿』、城塚訳、P.11―12）。「本章の結びの章、すなわちヘーゲル弁証法と哲学一般とへの対決は、今日の批判的神学者とは反対に、私はどうしても必要だと考える。なぜなら、この仕事はまだ成しとげられていないからである」（同、P.13）。

『草稿』の内容は、これを大別するとつぎの三つの部分から成っている。

（一）「国民経済的諸事実」や「国民経済学」を批判的に検討する部分――これは『草稿』のうち、主として「第一草稿」（①労賃、②資本と利潤、③地代、④疎外された労働）および「第二草稿」（私的所有の関係）、「第三草稿」の一部（①私的所有と労働、③欲求、生産、分業、④貨幣）にあたる。

（二）私的所有の廃止と共産主義の実現、そこでの人間的労働のありかたを説き、誤った共産主義的見解を批判す

る部分――主として「第三草稿」（そのうちの②私的所有と共産主義、③欲求、生産、分業）がこれにあたる。

（三）ヘーゲル弁証法とヘーゲルらの哲学一般を批判する部分――これは「第三草稿」の⑤（ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判）、「第四草稿」（ヘーゲル『現象学』最終章についてのノート）がこれにあたる。

右の内容やさきの「序文」からも明らかなように当時のマルクスの課題は、従来までの哲学を根本的に止揚するとともに、ブルジョア経済学と幼稚な共産主義的思想を批判克服して、彼自身の「人間観」、「世界観」を形成することにあったといえよう。

『草稿』はこの課題をうけて、「ヘーゲル弁証法と哲学一般の批判」という最終目標をもちつつ、当時の経済学と共産主義的見解を批判的に検討する著述用の草稿の一部である。

ところで、右『草稿』の経済研究に対しては、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』（一八四四年二月、『独仏年誌』に掲載）が大きな啓発的彼割を果しているのであって、このことは、さきに引用した『草稿』の「序文」にも「私がフランスやイギリスの社会主義者のほか、ドイツの社会主義的諸労作を利用したことはいうまでもない。しかし、この科学についての内容ゆたかで独創的なドイツの労作といえば、……ヘスの諸論文[6]と、『独仏年誌』のなかのエンゲルスの『国民経済学批判大綱』とに集約される」とのべられていることからみても明らかである（P.12）。ちなみに、『国民経済学批判大綱』でエンゲルスは、すでに「社会主義の立場から近代経済制度の基本的経済現象を私的所有の支配の必然的結果として考察し[7]」、競争を通じて激化するブルジョア的生産の諸矛盾を美事にデッサンしている。そして、私的所有の諸法則を展開した点で国民経済学を評価すると同時に、彼らが私的所有そのものを無批判にうけいれている点を批判している[8]。以後の考察をみれば、この把握が「労働疎外」論にいかに積極的にとり入れられているかは一

目瞭然となるであろう。

（6）Moses Hess（1812—1875）の諸論文とは、『社会主義と共産主義』、『行為の哲学』、『一つのそして全体の自由』等をさす。彼はドイツ真正社会主義を代表する一人であり、フォイエルバッハ的「疎外」概念を宗教の領域から社会的経済的領域へ適用する点——たとえば共産主義と「所有の範疇」に関する考察——でマルクスに影響を与えたといわれている（『草稿』P.137 参照）。ヘスとマルクスとの関連についての研究は、ルカーチ、コルニュを始め多数あるが、『草稿』（序文）でいわれている「内容ゆたかで独創的な労作」という評価の具体的意味を直接とりあげて考察しているものとしては、さしあたり山中隆次氏の論文「ヘスとマルクス」（経済学史学会編『「資本論」の成立』〈岩波〉所収）をあげうる。なお、良知力氏の著書『初期マルクス主義試論』（未来社）の「3・ヘスと若きマルクス」も参考になる。

（7）レーニン『フリードリッヒ・エンゲルス』（Ленин Сочинения, Том. 2, P. 10,〈大月書店〉『レーニン全集』第二巻、P.8）。

（8）つぎの諸叙述はこの点を端的に示している。

「生産のさいに主要なものであり、『富の源泉』であり、自由な人間的活動である労働は、経済学者のもとではさんざんな目にあっている。……労働生産物が賃銀として労働と対立し、労働から分離され、……競争によって決定される。われわれが私的所有を廃棄すれば、この不自然な分離もまたなくなり、労働はそれ自身の報酬となり、……ある物の生産費の決定に対して労働のもつ意義が明るみにでる」（M. E. Werke, B. 1, S. 512, 訳、第一巻、P. 556）。

「資本対資本、労働対労働、土地対土地の闘争は、生産を高熱状態にかりたて、この状態のもとでは生産は自然的および合理的な関係をすべて転倒させる」、「経済学者はこの狂った状態を理解することがけっしてできなかった」（Ibid, S. 516, 訳、第一巻、P.560）。

「一般に大所有は小所有よりもはるかに急速に増加する。……所有のこの集中は、他のすべての法則と同じく、私的所有に内在的な法則である。中間の諸階級はますます消滅していって、ついに世界は百万長者と貧民に……分かれるにちがいない」（Ibid, S. 522, 訳 P. 566）。

「労働力の生産は競争によって規制されるということ、労働力はつねに就業の手段を圧迫するということ、したがって、こ

のような利益が生じるはずであるとしても、ふたたび労働を求める過剰な競争者がすでにこれをまちうけていて、その結果この利益を幻想的なものにしてしまうのに反して、労働者の半数における生活手段の突然の剝奪、他の半数における賃金の下落という不利益は、幻想的なものではない……文明によってかくも無限に高められた分業のもとでは、労働者は彼がこの特定のつまらない労働のためにこの特定の機械について使用されることができる場合だけ生きてゆくことができるのだということ、……」(Ibid, S. 524, 訳、P. 568—569)。「自由主義経済学のなしとげた唯一の積極的な進歩は、私的所有の諸法則を展開したことである」(Ibid, S. 502, 訳、P.546)。

さて、その梗概をみようとする「労働疎外」論が集約的に論及されているのは、『経・哲草稿』のうちの「第一草稿、四、疎外された労働」であるが、その内容を理解するためには、あらかじめ、ヘーゲルやフォイエルバッハの哲学で重視されている「疎外」(Entfremdung) という概念を、換言すれば、彼らの「疎外」論を、当時マルクスがどのように批判しかつ摂取しようとしていたかについて知っておかねばならない。そこで、この点を『経・哲草稿』のうちの「ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判」に基づいてみておくことにしよう。

元来、「疎外」という概念が思惟の弁証法的運動をあらわす枢要な概念として駆使されるのは、ヘーゲルの『精神現象学』(9)を嚆矢とする。

(9) Hegel : Phänomenologie des Geistes, 1807. (樫山欽四郎訳、〈河出書房新社〉、世界の大思想第十二巻)。ルカーチによれば、元来この語源は Alianation で、経済的には商品の「譲渡」を意味し、また自然法的な社会契約説では社会成員が契約においてその原初的自然権を共同体に「譲渡」することを意味するものであり、これをヘーゲルが「フランクフルト時代」以後にそれまでの「既成性」(Positivität) なる概念に代えて用いたものである (G. Lucács : Der junge Hegel, 1948. ルカーチ全集〈白水社〉第十一巻下、P. 501〜502)。

彼によれば、意識は低い次元から高い次元へ、感覚的「経験」から理性的「経験」へと自己を高め豊富化してゆ

き、最後に絶対知に達するのであるが、この発展は意識が一方では自己を対象化しその対象を自分に対立する疎遠な他者として区別する過程であると同時に、他方では（その対象が自らの生みだしたものであり、自分の内部での区分だということを自覚する点では）、その対象のなかに自己自身を意識しこの対象を自己として「回復」する過程でもある。そして前の場合が意識の「自己疎外」の過程であり、後の場合がその「奪回」（または「止揚」）の過程である。

「精神が対象となるのは、精神が運動であり、自己にとって他者となり、自己自身の対象となりながら、この他在を廃棄するからである。そして経験は、ほかならぬそういう運動と呼ばれる。この運動のなかでは、直接的なもの、未経験のもの、つまり抽象的なものは、感覚的存在の場合であろうと、また考えられただけの単純なものの場合であろうと、自己を疎外し、次にこの疎外から自己に帰る。こうして今直接的なものは意識の所有物ともなるとき初めて、その現実と真理をえて表わされることになる」（ヘーゲル『精神現象学』前掲訳、P. 33）。

（なお、『現象学』ではこの意識の発展＝「知の生成」は、A意識→B自己意識→C理性→D精神→E宗教→F絶対知、という諸段階をへておこなわれるものとされている）。

以上をみるかぎりでは、ヘーゲルの「疎外」概念は、主体たる意識の運動で生みだされる対象（客体）が主体から独立化し主体に疎遠なものとして対立する過程――それは同時に、意識が右の対立を止揚し発展してゆく必然性を内包した過程にほかならない――をあらわす概念だといってよい。ただこのばあい、ヘーゲルにあっては人間の本質が精神あるいは意識とみなされているから、「疎外」といってもすべてがこの精神の「疎外」にすぎず、また意識が自己を現実世界にあらわしてゆくすべての形態がその「疎外態」にほかならない。したがって「疎外」の歴史全体と「疎外態」の奪回全体は、ともに抽象的精神の産出史だということにならざるをえない。だから富や国家が人間的本

質の「疎外態」として示されている場合も、それらはつねに精神の一つのありかたとしてつかまれているのであり、したがってまた、その止揚といっても結局、意識の内部での止揚にすぎない（だから彼の所論で、現実への批判とかその止揚という見地がみられるにしても、それは現実そのものを批判し廃止するというよりは、精神の自己回復の運動に解消され、結局は肯定されざるをえぬはめになってしまう）。ここに彼の「現象学」したがって「疎外」論の観念性があるといわねばならない。[10] そしてフォイエルバッハが批判したのも、まさにこの点にほかならなかった。

(10) ヘーゲルにあっては、「外化の歴史全体と外在態の奪回全体とは、抽象的すなわち絶対的思惟の、論理的で思弁的な思惟の産出史にほかならない。したがって、こうした外化とか、外在態の止揚とかの本来の要点となっている疎外とは、即自と対自との対立、意識と自己意識との対立、客観と主観との対立である。すなわち……思想そのものの内部での対立なのである」（『草稿』、P. 196）。

彼は、主著『キリスト教の本質』で、ヘーゲル弁証法の「核心」をなす（意識の）疎外概念を感性的現実的人間の立場から「人間の自己疎外」の問題としてとりあげ、神＝宗教を人間意識の疎外態として批判し、ヘーゲル哲学に対しても、「人間が神についてもっている意識を神の自己意識とするヘーゲルの思弁的説教もまた、右のような自己疎外の過程に基づいている」と批判している。[11]

(11) Feuerbach : Das Wesen des Christentums, 1841,（船山信一訳〈岩波文庫〉下巻、P. 76）。

このように、疎外を生みだす主体を意識ではなく現実の人間に求めることによって、従来までの観念論哲学を根本から批判し「真の唯物論と実在的科学とを基礎づけた」（『草稿』、P. 191）ところに彼の功績が存している。

とはいえ、フォイエルバッハは彼の批判を宗教と哲学における人間の「自己疎外」のそれに留め、人間を愛によっ

て結ばれる「類的存在」と規定するのみでそれ以上人間を具体的、歴史的にとらえようとはしなかった。この点では、ヘーゲルの「疎外」概念の批判もまた抽象的で一面的なものに留まらざるをえず、『精神現象学』に内包されている偉大な側面を評価しえぬことになる。

すなわちヘーゲルにあっては、観念的で神秘的だとはいえ、その背後で歴史における人間のありかた――とりわけ労働のありかた――をみつめつつその弁証法的運動を表現しようとする面があったのに、フォイエルバッハは、ヘーゲルの「否定の否定」という弁証法をもっぱら哲学の自己矛盾――絶対精神を否定してもその否定をさらに否定することで結局肯定するという自己矛盾――としてとらえ、その観念性を拒否するために単なる「感性的人間」を無媒介に対置するだけでこうしたヘーゲルの積極的側面を評価しえず、人間をその現実的活動・労働において弁証法的に把握しえなかったのである。

マルクスは、すでに当時こうした彼の弱点に気づいていたと考えられる。

「フォイエルバッハは、否定を、もっぱら哲学の自己矛盾としてのみ把握している。すなわち、神学（超越者など）を否定した後でそれを肯定する哲学、したがって自分自身に対立して肯定している哲学としてのみ、把握しているのだ。……それだから、そうした背定にたいして、感性的に確実な肯定、自分自身の上に基礎をもつ肯定が、直接にまた無媒介に対置されるのである。だがヘーゲルは」（否定の否定を通じて）、「たんに抽象的、論理的、思弁的な表現にすぎなかったが、歴史の運動に対する表現を見つけだしたのであった。だがこの歴史はまだ、一つの前提された主体としての人間の現実的な歴史ではなく、ただやっと人間の産出行為、発生史であるにすぎない。われわれは、この抽象的形式を解明するとともに、ヘーゲルにおけるこの「歴史の」運動が、最近の批判とは対照的に、フォイエルバ

ッハの『キリスト教の本質』における同じ過程に対してもっている相違を、というよりむしろ、ヘーゲルにおいてはまだ無批判的であったこの運動の批判的な形態を、解明することにしよう」(P.192—193)。

「ヘーゲルの『現象学』とその最終的成果とにおいて——運動し産出する原理としての否定性の弁証法において——偉大なものは、なんといっても、ヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程としてとらえ、対象化を対象剥離として、外化として、およびこの外化の止揚としてとらえていること、こうして彼が労働の本質をとらえ、対象的な人間を、現実的であるゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として概念的に把握しているということである」(12)(P.119)。

(12) 参考までに『現象学』における労働に関するヘーゲルの把握を二、三示しておく。

「…労働は形成する。ほかでもなく労働している人にとっては、対象は自立性をもっているのだから、対象に対する否定的関係は対象に形式を与えることになり、永続させることになる」。この「行為は同時に個別性であり、意識の純粋な自分だけの有である。そこでこの意識は労働しながら自分の外に出て永続の場に入る。だからこのため、労働する意識は自己自身としての自立的存在を、直観するようになる」(前掲、P.121—122)。「語られた言葉や労働は、表現(外化)ではあるが、これらの外化のうちでは、個人は、もはや自らを自己自身に即して保ち保有しているのではなく、内なるものを全く自分の外に出してしまい、それを他者に委ねている。……外化が、内なるものを表現するだけでなく、そのまま内なるもの自身である……」(P.184)。「財富は……やはり一般的な精神的なものであり、すべての人々の労働と行為が、絶えず生成して行く結果であり、更にまた、すべての人々の享楽となって解体して行く。享楽するときには、個人は自分だけ(対自的)となり個々人となりはするがこの享楽そのものは、一般的行為の結果であり、また一般的労働と万人の享楽とを、相互につくり出すのである」(P.288)。

以上のようにマルクスにあっては、ヘーゲル「疎外」論の観念性がフォイエルバッハを「梃子(てこ)」にして批判される(13)と同時に、フォイエルバッハの「自己疎外」論の抽象性が克服されている。またひるがえって、ヘーゲル「疎外」論

の積極面が、思弁的とはいえ人間と歴史のありかたを弁証法的に表現する――特に、人間の産出行為としての労働の本質的意義とその弁証法的ありかたをとらえている――という点で評価され、かつ彼（ヘーゲル）の労働に関する把握の欠陥が、労働の肯定面だけをとらえてその否定面を看過している点で批判されている。[14] だからマルクスの場合には、どのような状態のもとでもつねに労働が「疎外された労働」として現われるのではなく、「労働の対象化」と「労働の疎外」とは区別されることになる。

「労働の生産物は、対象のなかに固定された、事物化された労働であり、労働の対象化である。労働の実現は労働の対象化である。国民経済的状態のなかでは、労働のこの実現が労働者の実現性剝奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、〔対象の〕獲得が疎外として、外化として現われる」（P. 87）。「労働者が彼の生産物のなかで外化するということは、ただたんに彼の労働が一つの対象に、ある外的な現実的存在になるという意味ばかりでなく、また彼の労働が彼の外に、彼から独立して疎遠に現存し、しかも彼に相対する一つの自立的な力になるという意味を、そして彼が対象に付与した生命が、彼にたいして敵対的にそして疎遠に対立するという意味をもっている」（P. 88）。

以上から明らかなように、マルクスにおいては、「疎外」という概念は、あくまで現実の社会、人間的労働の現実的なありかた、を反映するかぎりで意味のある概念なのであり、しかも現実的労働の弁証法的なありかた――人間は現実的労働によってのみ自分を産出し維持し発展させるが、その労働がある条件下では労働主体に対して疎遠で敵対的なものになり、その産物がかかるものとして自立化すること、かつそのことを通じて右の対立を止揚する諸契機が必然的に成長させられること（したがってまた、人間的活動の発展の必然的一通過点）をあらわす概念なのである。[15]

ところで、こうした把握が、一方では古典派経済学の研究（特にエンゲルスによるその批判的研究）に助けられたものだとすれば、他方ではこの把握が、断片「疎外された労働」における経済的研究に生かされているのだといえよう。

なお、『経済学、哲学草稿』で強調されているマルクスの「自然主義＝人間主義」（Naturalismus＝Humanismus）という把握は、ヘーゲル、フォイエルバッハの以上のような批判的摂取をとおして形成された当時の基本的立場を端的に要約したものである。つまりそれは、人間をあるがままの自然（「活動的自然存在」）としてつかむと同時に、その活動が外的自然をわがものとする意識的で共同的な生産活動としておこなわれ、その労働を通じてのみ自己および社会を産出し発展させてゆくという特殊な自然存在としてとらえるという立場を表現したものである。(16)

(13) 「ヘーゲルにあっては、人間的本質、人間は、自己意識に等しいとみなされる。したがって、人間的本質の一切の疎外は自己意識の疎外にほかならないのである。自己意識の疎外は、人間的本質の現実的な疎外の表現、その現実的な疎外が知識と思惟のうちに自分を映しだしている表現とはみなされていない。……したがって、疎外された対象的本質をふたたび獲得することは、すべて自己意識への合体として現われる」（『草稿』、P. 201～202）。

「フォイエルバッハの偉業……(1)哲学は、思想のなかにもたらされ思惟によって遂行された宗教にほかならず、したがって、人間的本質の疎外のもう一つの形式、現存様式として〔宗教と〕同様に断罪されるべきだ、ということを証明したこと。(2)真の唯物論と実在的な科学とを基礎づけたこと」（同、P.191）。

(14) 「ヘーゲルは近代国民経済学の立場にたっている……ヘーゲルは、労働を人間の本質として、自己を確証しつつある人間の本質としてとらえる。彼は労働の肯定的な側面をみるだけで、その否定的な側面をみない」（『草稿』、P.199～200）。

なお、ここでマルクスは、ヘーゲルが「国民経済学」の立場にたっていると指摘しているが、ヘーゲルにおける弁証法の形成と経済学との深い結びつきについては、ルカーチの著名な文献『若きヘーゲル』（注9参照）にくわしい。

(15) ヘーゲル、フォイエルバッハとマルクスとの関連についての研究は膨大な数にのぼっており、以上の考察もそれらの一端

をふまえたものであるが、紙数の都合でほんの一部を除く以外はその一つ一つを指示しえなかった。

(16)　『草稿』、P.133—134, P.205—208, 参照。

以上の理解にもとづいて、つぎに断片「四、疎外された労働」を要約することにしよう。

まず、断片「疎外された労働」の前におかれている三つの断片、「労賃」、「資本と利潤」、「地代」では、主としてスミス、リカード、セーらの抜粋によりつつ、労働者にとっては、「資本と土地所有と労働との分離は、必然的な、本質的な、しかも有害な分離」であり、彼らにとって「致命的」なものであること（P.17〜18）、そして「労働者が商品へ、しかも最も惨めな商品へ転落すること、労働者の窮乏が彼の生産の強さと大きさとに反比例すること、競争の必然的な結果は、少数の手中への資本の蓄積であり、したがっていっそうおそるべき独占の再現であること、最後に資本家と地主との区別が、耕作農民とマニュファクチュア労働者との区別と同様に消滅して、全社会が有産者と無産の労働者という両階級へ分裂せざるをえないということ」（P.84）が、資本家的生産の現実的諸事態において明らかにされている。さらに、現条件のもとでは「労働者の没落と貧困化は、彼の労働の産物であり、……今日の労働そのものの本質から生ずるのだ」（P.27）という把握が示され、「人類の大部分がこのように抽象的な労働へ還元されるということが、人類の発展においてどのような意味をもつか」、プルードンのように労賃の引き上げや平等を説くのはどの点で誤っているか、という問題提起がなされている（p. 28）。

「四、疎外された労働」は、右の問題提起をうけ、つぎのようにその課題を提示している。

「国民経済学は私的所有という事実から出発する。だが国民経済学はわれわれに、この事実を解明してくれない。……国民経済学は、これらの法則を概念的に把握しない」、「いまや私的所有、所有欲、労働と資本と土地所有との分

離〔という三者〕のあいだの本質的関連を、また交換と競争、人間の価値低下、独占と競争などの本質的関連を、さらにこうした一切の疎外と貨幣制度との本質的関連を概念的に把握しなければならない」(P.85〜86)。

この課題を究明するさい、「国民経済学」のように、「ある架空の原始状態にわが身をおく」のではなく、つぎのような「国民経済上の現に存在する事実から出発」せねばならない。

「労働者は、彼が富をより多く生産すればするほど、彼の生産の力と範囲とがより増大すればするほど、それだけますます貧しくなる。……労働は自分自身と労働者とを商品として生産する。しかもそれらを労働が一般に商品を生産するのと同じ関係のなかで生産するのである。さらにこの事実は、労働が生産する対象、つまり労働の生産物が、ひとつの疎遠な存在という、生産者から独立した力として、労働に対立するということを表現するものにほかならない。……労働の実現は労働の対象化である。国民経済的状態のなかでは、労働のこの実現が労働者の現実性剥奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、〔対象の〕獲得が疎外として、外化として現れる」(P.86〜87)。

分析は、こうした国民経済的事実を、「疎外された労働」としてとらえ、その内容をつぎの四つの面から究明してゆく。

①「労働生産物からの疎外」。――「対象の獲得は、労働者がより多くの対象を生産すればするほど、彼の占有できるものがますます少なくなり、そしてますます彼の生産物すなわち資本の支配下におちいっていくほど、それほど激しい疎外として現われる。これらすべての帰結は、労働者が自分の労働の生産物に対して、ひとつの疎遠な対象に対するようにふるまうという規定のうちに横たわっている」(P.87)。「労働者が彼の生産物のなかで外化するというこ

とは、ただたんに彼の労働が一つの対象に……なるという意味ばかりでなく、また彼の労働が彼の外に、彼から独立して疎遠に現存し、しかも彼に相対する一つの自立的な力になるという意味を、そして彼が対象に付与した生命が、彼に対して敵対的にそして疎遠に対立するという意味をもっているのである」(P.88)。

②「労働の疎外」。――「これまでわれわれは、ただ一つの側面、すなわち労働者の、彼の労働の諸生産物に対する関係からだけ、労働者の疎外、外化を考察してきた。しかし疎外は、たんに生産の結果においてだけではなく、生産の行為のうちにも、生産的活動そのものの内部においても現われる。……労働の対象の疎外においては、ただ労働の活動そのものにおける疎外、外化が要約されているにすぎないのである」(P.91)。

「では、労働の外化は、実質的にどこにあるのか。第一に、労働が労働者にとって外的であること、すなわち労働が労働者の本質に属していないこと、そのために彼は自分の労働において肯定されないでかえって否定され、幸福と感ぜずにかえって不幸と感じ自由な肉体的および精神的エネルギーがまったく発展させられずに、かえって彼の肉体は消耗し、彼の精神は頽廃化する、ということにある」(P.91)。労働生産物からの疎外が「事物の疎外であるのに対し、これは自己疎外である」(P.93)。「国民経済学は、労働者（労働）と生産とのあいだの直接的関係を考察しないことによって、労働の本質における疎外を隠蔽している」(P.90)。

③「類からの疎外」。――人間は「類的存在」(Gattungswessen) であり、「生産的生活」、「自由な意識的活動が人間の類的性格」をなす (P.95)。だが、「疎外された労働」は、「人間にとって類生活を、個人生活の手段とならせるのである。第一に疎外された労働は、類生活と個人生活とを疎外……し、第二にそれは、抽象のなかにある個人生活を、同様に抽象化され疎外されたかたちでの類生活の目的とならせるのだ」(P.95, この「類からの疎外」については注31を参

照されたい)。

③「人間からの人間の疎外」。――これまでのことから生ずる『直接の帰結の一つは、人間からの人間の疎外である』。「……一般に、人間の類的存在が人間から疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から、またこれらの各人が人間的本質から疎外されているということを、意味している」(P.98)。

以上では、「国民経済的事実」から出発し、「この事実の概念を疎外された労働と表現して」この概念を分析した(P.98〜99)。つぎに、かかる概念が「現実においてはどのように自己を表わし示さないではおかないか」がとりあげられる。そして実践的現実的世界では、「自己疎外」は他人たちに対する実践的現実的関係を通じてだけ現れることから、労働者は、「疎外された労働」を通じて自分の生産と生産物に対する関係と同時にそれらに対する他の人間の諸関係をも生みだしているということ、つまり労働者は、労働に対する資本家の関係を生み出す。こうして私的所有は、「疎外された労働の必然的帰結」にほかならぬことが明らかにされる。

「たしかにわれわれは、外化された労働(外化された生活)という概念を、私的所有の運動からの結果として、国民経済学から獲得してきたにちがいない。しかしこの概念を分析すると、……私的所有は、それが外化された労働の根拠、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にほかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相互作用へと変化するのである」(P.102)。

こうしてつぎの二点が引きだされる。

第一。資本と労働の関係が「疎外された労働」の所産である以上、労賃の強力な引上げも奴隷の報酬改善を要求することとかわりがないということ(P.103)。

第二。私的所有からの社会の解放は、労働者の解放という政治的なかたちで表現されること。なぜなら、「生産に対する労働者の関係のなかに、人間的な全隷属状態が内包されており、またすべての隷属関係は、この関係のたんなる変形であり帰結」にすぎぬからである（P.104）。

ついで、全経済的諸範疇は、「疎外された労働」と私的所有という二つの概念の発展形態であり、これら二つの要因の助けを借りて、経済学上の全範疇の展開をはかりうるという指摘がおこなわれる。そののち、右の作業に先立ってつぎの二つの課題が提起されている。すなわち、「(1)疎外された労働の結果として明らかになったような私有財産の一般的本質を、真に人間的なそして社会的な所有に対するそれの関係のなかで規定すること」。「(2)どのようにして人間は自分の労働を外化し、疎外するようになるのか」（P.104—105）。

この課題に関しては、つぎのような指摘がある。

「われわれはすでに、私有財産の起源に関する問題を、人類の発展行程に対する外化された労働の関係という問題におきかえることによって、この課題を解決するために多くのものを獲得してきた。なぜかといえば私有財産について語る場合、人間の外部にある事物を問題にしなければならぬと、一般に信じられているからである。だが労働について語る場合、ひとは直接に人間そのものを問題としなければならない。この新しい問題提起は、すでにその解決をふくんでいる」（P.105）。

草稿はこのあと、「疎外された労働」の「物的な総括的表現」たる私的所有が二つの関係——労働者の生産物、労働、非生産者等に対する関係、非生産者の生産物、労働者に対する関係——をふくんでいることを指摘し、今度はこの関係を考察するとしながらそこで中断されている。

以上が、断片「四、疎外された労働」の要約である。

二

つぎに、断片「疎外された労働」だけでなくそれ以外の諸断片や『経済学の抜粋ノート』をふくめたうえで、「労働疎外」とそれに関連する諸論述で当面の視角からさしあたり注目しておくべきものの諸要点を、改めて摘出し確認しておくことにしよう。

イ、ヘーゲルやフォイエルバッハの場合には「疎外」概念が、前者では意識の運動のありかたを、後者では愛と宗教における抽象的人間のありかた（宗教における人間の自己疎外）を表わす概念であったが、マルクスの場合には、社会的存在としての人間の現実的労働の弁証法的なありかた——つまり、人間と社会を産出し発展させる現実的労働が労働主体に対して疎遠で敵対的なものになり、その産物がかかるものとして独立化しむしろ彼に敵対した力をもつようになること、そしてそのことが同時に右の対立を止揚するための諸契機をも生みだしていくということ——こうしたありかたをあらわすところにその中心的意義があった。

それゆえマルクスが、『経・哲草稿』で「疎外された労働」、「労働の疎外」という概念を駆使して「市民社会」の「全ての国民経済的諸事実」や「国民経済学」を究明し批判しようとしていることは、彼が労働に一切の基本をおき、労働主体の側からみて、「市民社会」では人間的労働のありかたが、経済的諸事実や諸概念にどのように表示されているのか、かかるありかたを止揚する現実的基盤はどこにあるのかを究明しようとしていることを意味しているのである。

ロ、マルクスの場合、動物の生命活動が肉体的欲求によってのみ行なわれ、自分やその子だけを（それに必要なものだけを）「つくる」活動であるのに対して、「肉体的精神的エネルギーの発露」として行なわれる人間的労働は、つぎのような諸特質――すなわち、「意識的な活動」、「肉体的欲求からの自由のなかで」行なわれる「全自然を再生産する」活動、「対象にその〔対象〕固有の規準をあてがう」（つまり自然法則を発見し利用する）ことによって行なわれる生産的活動、分業をとおして行なわれる「共同体的な社会的な活動」――においてとらえられている。[17]

(17) 『草稿』, P.93～97, P.133～134, P.168～169, P.175, etc. 参照。なお『経済学ノート』では、人間的労働のかかる諸特質のゆえに、人間は労働を通じて「人間的欲求を充足」し、自分の力と個性を実現し確証した喜びを、また「生命発現の喜び」や自分が「共同体的存在であることを確認したと意識する喜び」を直接に味うとのべられている（杉原、重田訳〈未来社〉、P.117～118）。

他方、「市民社会」の「国民経済学的状態」のもとではかかる労働の特徴が転倒し、「疎外された労働」として現われるのであるが、その究明において事実上で資本家的生産についてのべられている諸部分をまとめてみるとつぎのような把握が浮び上ってくる。

労働者が「資本と土地所有」から分離されていることは彼らの「致命傷」になっていること（P.17―18）。労働者の労働が賃銀の獲得だけを目的とした商品と化すことにより、資本のための存在、資本に従属した存在になる。[18] また労働も彼らの本質には属さない外的なものになり、非自発的で苦痛なものになる（P.92）。さらに彼の労働の生産物も資本として彼から独立し彼を支配する力になる（P.100, P.40）。分業や資本の集積は労働の生産的な力をたかめ富を増大させるが、それは労働者を機械にまで落ちぶれさせ、資本家への彼の従属、彼らの過剰生産をもたらす（P.26）。労働

者が富や商品をより多く生産すればするほど、それだけ貧しくなり安価な商品になる。このようにして、「労働者の没落と貧困化は、彼の労働の所産であり、彼によって生産された富の所産である。窮乏は……今日の労働そのものの本質から生ずる」[19]（P.27）。そして労賃は「疎外された労働」の直接の結果であり、後者は私的所有をうみだしかつそれと相互に依存しあっている以上、一方の没落は他方の没落にならざるをえない（P.104）。

なお、私的所有、資本、「疎外された労働」の発展関係についてはつぎのようにのべられている。労働の必然的発展の現実的な進行から「資本家すなわち完成せる私的所有の、未完成な……私的所有つまり土地所有者に対する必然的な勝利がやってくる」、「資本から区別された土地所有は……未完成な資本である」（P.116～117）。人間的活動が、一方では疎外された労働としておこなわれ、他方では、人間的活動の対象が資本として生産されるという対立が極端にまでおしすすめられるとき、それは必然的に私的所有関係すべての極点、頂点となり、そしてその没落となる（P.110～111）。

（18）「労働者は資本を生産し、資本は労働者を生産する。……そして労働者としての、商品としての人間が、全運動の産物なのである。もはや労働者以上のなにものでもない人間……にとって、彼の人間的な諸特性は、それらが彼に疎遠な資本のために現存する限りでのみ、現存するのである。……それゆえに、資本が［自分は］もはや労働者のために存在するのではないと思いつくやいなや……労働者はなんらの仕事ももたず、したがってまたなんらの賃銀もえない。……彼は自分を埋葬させること、餓死などをすることができるだけである。労働者は自分にとって（für sich）資本として現存するようになるやいなや、そのときにのみ労働者として現存するのであり、また資本が労働者に対して（für ihn）現存するようになるやいなや、そのときにのみ、労働者は資本として現存するのである。資本の現存は労働者の現存であり、彼の生活である」（P.107—108）。

（19）『草稿』の直後（同じ年）にかかれた『聖家族』においては、「資本の運動がいかに窮乏を生みだしているかをくわしく立証」する立場が正しいこと、「賃労働が他人の富と自分自身の窮乏を生みだすこと」が指摘されている（M.E. Werke, B. 2,

S. 36—37, 訳、P. 32—33)。なお、「賃労働」という言葉がはじめて使われたのは、おそらくこの『聖家族』でであろう。

ハ、つぎは「物神性」の問題にかかわる把握と「国民経済学」の評価について。

「貨幣によるすべての人間的および自然的な性質の転倒と混同」、「貨幣の神秘的な力——は、人間の疎外された類的本質、外化されつつあり自己を譲渡しつつある類的本質としての、貨幣の本質のなかに存している」(P.183—184)。「貨幣は、人間の労働と存在とが人間から疎外されたものであって、この疎外されたものが人間を支配し、人間はこれを礼拝するのである」(「ユダヤ人問題によせて」、M.E.Werke, B.I, S. 375, 訳、P. 411)。「人間は、利己的欲望の支配下では、自分の生産物および活動をある外部の存在の支配下において、それらに外部の存在——貨幣——の意味をあたえることによってはじめて、実践的に活動し、実践的に商品をつくりだすことができるのである」(Ibid, S. 376—377, 訳、P. 413)。A・スミスの地代に関する諸叙述、たとえば、「地代は、所有者が借地人にその使用を賃貸ししている自然力の産物とみなしうる」という主張にふれて。「スミスのこれらの命題の重要である。なぜならそれは、同じ生産費と同じ規模の場合には、地代を土地の豊かさの大小に還元しているからである。したがって、土地の豊かさを土地所有者の特性に変えてしまうという国民経済学における概念の転倒が、明白に証明されている」(P.64—65)。また、労働者と資本家との関係、彼らの労働、労働生産物への関係が、私有財産という物的な表現をとるという把握[20](P.106)。

(20) なお、「物神崇拝」(Fetischismus) という用語は、『草稿』ではつぎのような使われかたをしている。

「いまだに貴金属の感覚的な輝きによって眩惑されており、したがってあいかわらず金属貨幣の物神崇拝者である諸国民は——まだ完成の域に達した貨幣諸国民ではない。フランスとイギリスとの対照」(P.160)。「啓蒙された国民経済学にとっては、私有財産を人間に対するたんに対象的な存在としてしか認めない重金主義および重商主義の一派は、物神崇拝者……にみえる」(P.119—120)。

「国民経済学」の評価について。「国民経済学」は近代産業の一産物である。それが「労働を国民経済学の唯一の原理にまでひきあげ」、労賃と資本との「反比例的な関係を分析したこと」は、「大きなそして首尾一貫した進歩であった」(P.109—110)。とりわけリカード学派において、自らがまきこまれる「一切の外見上の諸矛盾におかまいなしに——労働を富の唯一の本質として……いっそう徹底的に展開し、この学説の諸帰結が、……人間に敵対的なものであることを立証し」たこと、また「封建的財産の表現」たる地代に「とどめの一撃を加えたこと」は、「彼らの科学がより徹底的により真実に展開されているからにほかならない」(P.121—122)。

だが他方、彼らは私的所有をはじめ「自分が説明すべきものをあらかじめ仮定し」てしまい、「運動の関連を概念的に把握しない」(P.84—85)。また彼らは、「労働から出発するにもかかわらず、労働にはなにものをも与えず、私的所有にすべてを与え」(P.103)、「人間を承認するような外見のもとで、むしろただ人間の否認を徹底的に遂行するものにすぎない」(P.120)。「彼らの原理とは、こうした分裂の原理」なのであるが、かかる矛盾は産業の現実的分裂によって確認されている(P.122)。

二、労働者の解放と共産主義について。生産に対する労働者の関係のなかに人間的な全隷属状態がふくまれており、社会の全隷属関係も右の関係に土台をおいている点で、労働者の解放のなかにこそ一般的人間的解放がふくまれている[21](P.104)。

そしてかかる解放のために私的所有が止揚された場合にのみ、人間の全面的本質が全面的な仕方で獲得される。人間にとって、対象的現実が人間的本質諸力の現実として生成することによって、あらゆる対象が人間にとって人間自身の対象化として、人間の個性を確証し実現している諸対象として生成する。ゆたかな人間は人間的な生命発現の総

体を必要としている人間である（P.136—140, P.144）。

共産主義に関する把握をみると、従来までの共産主義は、女性の共有という思想にみられるように「私的所有の積極的本質をとらえていないし、同様に欲求の人間的性質をほとんど理解していないので、やはりまだ私的所有にとらわれており」（P.130）、嫉妬や所有欲をもとにして「均分化」を主張しているにすぎない。だがわれわれのいう共産主義は、「人間の自己疎外としての私的所有の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間的本質の現実的な獲得としての共産主義」（P.130）だという把握が提示されている。「全革命運動がその経験的基礎をも理論的基礎をも、私的所有の運動のなかに、まさに経済の運動のなかに、見いだすということ、このことの必然性はたやすく洞察される。物質的な、直接に感性的なこの私的所有は、疎外された人間的生活の物質的な感性的な表現である。私的所有の運動——生産と消費は、……人間の現実化……についての感性的な啓示である。宗教、家族、国家、法律、道徳、科学、芸術等々は、生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般的法則に服する。だから私的所有の積極的止揚は、人間的生活の獲得として、あらゆる疎外の積極的止揚であり、したがって人間が宗教、家族、国家等々からその人間的な、すなわち社会的な現存へと還帰することである」（P.131—132）。

(21)　「有産階級とプロレタリアートの階級は、同一の人間的自己疎外をあらわしている。だが前者の階級は、この自己疎外のうちに、快適と安固を感じており、この疎外が彼みずからの力であることを知っており、また疎外のうちに人間的生存の外見をもっている。後者はこの疎外のうちに廃棄されたと感じ、そのうちに彼の無力と非人間的生存の現実性を認めている」（『聖家族』、M. E. Werke, B. 2, S. 37, 訳、P.33）。

さて、『草稿』を中心とした「労働疎外」に関する以上の把握をどのように評価すべきか、あるいは右の把握が『資

本論』のそれとどのように関連しているかについては、右の四つの要点をみただけでもすでにある程度明らであるが、その点については次章以下で考察することにしよう。

とはいえ、ここで、さしあたりつぎの二点だけは確認しておくことができるし、またそうしておくのが妥当であろう。

その第一は、初期の「労働疎外」論は翌年の『ドイツ・イデオロギー』でほぼ確立される唯物史観の一つの基礎的な観点をふくみ、その「母胎」になっているという点である。

このことはまず、さきほどの引用文にもみられたとおり、すべての社会経済的現象の基本はこれを人間的労働に、「経済の運動」に求めるべきであり、「宗教、家族、国家、法律、道徳、科学、芸術等々は、生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般的法則に服する」(P.132) という把握に端的に示されている。[22] さらにこのことは、「国民経済学」が私的所有をはじめとする主要な経済的諸関係、諸概念を無批判に前提していることへの批判にも、およびそれらを弁証法的に「歴史的に」扱おうとする観点にも示されている。[23]

(22) 右の関連は、わが国だけでも向坂逸郎、杉原四郎、重田晃一氏らをはじめ大勢の人々によって指摘されている。

(23) 本章一六、二〇、二五ページ参照。

なお右の「労働疎外」論では、生産力と生産関係という概念は形成されていないけれども、つぎのようなとらえかたは、これらの概念への接近を示すものと考えることができる。

つまり一方では、「人間の疎外、一般に人間が自分自身に対してもつ一切の関係は、人間が他の人間に対してもつ関係において、はじめて実現され、表現される」(P.98)。「だから、疎外された労働を通じて、人間はただ生産の対象

や行為に対する彼の関係を、疎遠なそして彼に敵対的な人間に対する関係として生みだすだけでなく、彼はまた他の人間たちが彼の生産物に対してたつ関係を、そしてまた彼がこれら他の人間に対してたつ関係をも生みだす」(P.101)、「外化された労働の自分自身に対する関係……の産物として、……労働者および労働に対する非労働者の所有関係をみつけだした。……私的所有は、労働やその労働生産物や非労働者に対する労働者の関係と、労働者やその労働生産物に対する非労働者の関係という二つの関係を包含している」(P.105—106)、等々という把握がそうである。[24]

他方では、産業の発展を「人間の本質諸力」の展開された発揮としてとらえ(P.141)、「分業は労働の生産的な力をたかめる」(P.26)ことを肯定し、その分業が「類に適合した活動および本質力としての人間的な活動と本質力との、明らかに外化された表現」(P.175)であり、「スカルベクは人間のもつ生産諸力あるいは生産の本質諸力を二つの部分に区別する。(1)……人間の知性と特殊な労働的素質あるいは能力、(2)社会から——現実的な個人からではなく——由来したそれら諸力、すなわち分業と交換」(P.176)とのべられている把握がそうである。

(24) 参考までに、『経・哲草稿』と同じ年に(『草稿』の直後で、『ドイツ・イデオロギー』の直前に当る)に書れた『聖家族』の一叙述部分に対してレーニンがおこなった評注を示しておく。『聖家族』の叙述部分——「《平等な占有》という表象は、人間にとっての存在としての、すなわち人間の対象的存在としての対象は、同時に他の人間に対して人間があることであり、他の人間に対する人間の人間的関係であり、人間の人間に対する社会的関係である、ということの経済学的な、したがってなおまだ疎外された表現である」(M. E. Werke, B. 2, S. 44, 訳、P. 40, 傍線はレーニンによるもの)。それに対するレーニンの評注——「このところはきわめて特徴的である。というのは、マルクスがどのように彼の全〝体系〟の根本思想に、もしそういうことがゆるされるなら、まさに社会的生産関係の思想に近づいたかを示しているから」(Ленин сочинения, Том. 38, 訳、P.9)。右の諸点については、重田晃一氏の論文「労働疎外論と唯物史観」(『資本論の成立』〈岩波書店、経済学史学会編〉所収)が参考になる。

右のほかに、もう一つの点を確認しておくことができる。それは、初期の「労働疎外」論では、生産力と生産関係という概念が未形成であり、私的所有と「疎外された労働」の本源的発生、単純な商品生産と資本家的商品生産との区分等がまだ十分にとらえられておらず、不明確のままになっているということ、[25]したがって、人間および労働の把握が多少ともまだ不完全な側面を残しており、「疎外された労働」という概念にしてもそこにはまだ未分化な諸契機が内包されているということである。だが、この点は、当時、経済学の研究がはじまったばかりであり、経済史の研究もまだこれからというところであったことからみてやむをえない、[26]というよりむしろ当然であったといえよう。

また、右の諸特徴に制約されて、種々の用語にフォイエルバッハと同じ「哲学的表現」がもちいられ誤解をまねきやすい面があったこと、[27]さらに、「労働疎外」の解明が価値概念の究明をとおしておこなわれていないこともまた、疑いえぬ事実である。[28][29]

ただ、こうした諸点から、この「労働疎外」論が唯物史観の成立に対してもつ前述のような意義まで否定するのは正しくない。ちなみに、初期「労働疎外」論は、論理の出発点に「理想的人間像」を「先験的」に前提しているという観念論的誤謬を犯しているから、その自己批判によってのみ『ドイツ・イデオロギー』[30]の確立が可能になったのだといういわば双方のあいだに一種の断絶を認める見解がみうけられるが、それは前者のもつ諸特徴を統一的に理解しえず、前者から後者への発展、あるいは前者の把握を土台にして後者の把握が生じているという主要な関連を看過したものといわねばならない。[31]この点については、いずれまた第三章においてもふれるであろう。

(25) この点は、『草稿』の「疎外された労働」の最後ではじめて、「どのようにして人間は自分の労働を外化し、疎外するようになるのか」(P.105) が問われていることをみてもわかる。また、訳八十八ページから八十九ページその他にみられるような

「労働疎外」の説き方は、それをみる限りでは、他の搾取制度の収奪関係にも共通するような説き方だといえよう。いちいち名前をあげないが、この事実はすでに『経・哲草稿』に関するいくつかの諸研究が指摘しているところである。

(26) このことは、エンゲルスが翌年の『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の叙述にふれて、「それは、経済史についてのわれわれの当時の知識がまだどんなに不完全なものであったかを証明している」（『フォイエルバッハ論序文』〈一八八八年二月二一日〉）とのべていることからもうかがわれる。

(27) たとえば、「類」、「類的存在」ないし「類的本質」、「人間的本質」、「感性」、等がそうである。『ドイツ・イデオロギー』では、これらの用語はヘーゲル、フォイエルバッハ流の「伝統的」「哲学的表現」であって誤解をうけるのに「好都合なきっかけを与えた」ものとのべられている（M. E. Werke, B. 3, S. 217—218, 訳、P. 236—237）。また当時、マルクスがフォイエルバッハに強く影響されていたことは、エンゲルスがつぎのようにのべているとおりである。「われわれはみなたちまちフォイエルバッハ主義者となった。マルクスがこの新しい見解をどんなに熱狂的に迎えたか、また彼が——あらゆる批判的留保にもかかわらず——どんなにかれに影響されていたかは、『聖家族』を読めばわかる」（『フォイエルバッハ論』、松村一人訳〈岩波文庫〉、P.26）。その他、マルクスからフォイエルバッハへの手紙（一八四四、八、一）参照。

(28) 当時、リカードの労働価値説そのものに対してはこれを批判的に評価した叙述がみられるのであって、そうした叙述は、『経・哲草稿』とほぼ同時期の『経済学の抜粋ノート』にみられる。たとえば、ミルに関するノートにおいて、リカード学派は抽象的法則だけをのべて競争におけるその変化と止揚を無視している、価値と生産費との一致が不変の法則だというならばその不一致もまたそういえるではないか、という主旨の評注がある（『マルクス経済学ノート』、杉原、重田訳〈未来社〉、P. 85—86）。

ところで、「労働疎外」論は、労働価値論に敵対しそれを拒否していたため、価値法則によって搾取を解明していない点に主たる欠陥をもっているという見解が少なくない。たとえば、そうした見解の代表者と目されているW・ヤーンはつぎのようにのべている。

「ここで注意をひくのは、マルクスがその当時はまだ……労働価値説を拒否し、これに敵対していたということである」。「資本と労働との交換の問題が価値法則にもとづいて解明されなかったかぎりで、マルクスは労働価値説を受けいれることができなかった。したがって、彼は『経済学・哲学草稿』で労働の性格を分析するさいに価値の問題から出発せずに、労働の疎

外という哲学的観点から出発したのである」(W. Jahn, Der ökonomische Inhalt des Begriffs der Entfremdung der Arbeit in den Frühschriften von Karl Marx, in Wirtschaftwissenschaft, 1957, No. 6,『国際資料』昭和三十三年三月号所載、P.23—24)。

たしかに、『経済学の抜粋ノート』にはさきにみたような評注があり、また『草稿』では、価値概念そのものが出発点にされておらず、したがってその展開によって「資本と労働との交換」が解明されてはいない。しかし、『草稿』ではすでにみたように、リカードが「労働一般」を唯一の原理として自説を展開している点が高く評価される反面、彼らすべてが私的所有を前提してしまいそれを「概念的に把握」していない点が批判されているのであって、こうした古典派のもつ積極面と消極面との統一的な把握こそ『草稿』の基本線をなしているのである。またこうした把握を前提としてはじめて、マルクスの価値論の生成と発展が可能になるのであり、したがってリカードの労働価値論のより正確で首尾一貫した評価も可能になったのである。そうである以上、「労働疎外」論では労働価値論が「拒否」されているとしてそれをその主要な「欠陥」とみなしたり、またそれゆえに「労働疎外」という視点が生じたのだという評価は、一面的でありかつ結果論でしかないといわざるをえない。もっともヤーンは、のちの論文でさきの自説を撤回したようである(オイゼルマン、『マルクス主義と疎外』、樺俊雄訳〈青木書店〉、P.88—89参照)。なお、『聖家族』ではすでに、「あるものの生産に費やされる労働時間がそのものの生産費のうちに入ること」、「そのものの価値についての決定は、実質的にはその生産に費やされる労働時間にかかる」ことが明示されている(M. E. Werke, B. 2, S. 51—52, 訳、P. 47—48)。

(29) 初期の「労働疎外」論では、「私的所有」と「疎外された労働」との関連の説きかたが循環論法になっているという指摘もある。

「私有財産をうむのは、ただ疎外された労働の場合だけである。では『疎外された』という規定はどこからあたえられるのか? いうまでもなく私有財産の支配下ということからである。ところが『手稿』では私有財産はもっぱら労働の疎外から説明されている。これは一種の循環論法である」(林直道、「初期のマルクスにおける『資本論』の生成」〈『経済』、一九六七年五月増刊号、P.67)。

たしかに『草稿』では、一方では「疎外された労働は私的所有の直接の原因である」(P.104)とされ、他方では「私的所有は労働が外化される手段」だと説明されている(P. 102)。

だが、右の説明は、「市民社会」の「国民経済的状態」を前提としたうえで、「私有財産について語る場合、人間の外部にある事物を問題にせねばならぬと一般に信じられている」(P.105) ことに対して、それが人間的労働を本質としていること、私有財産も「疎外された労働」もこの本質の転倒した表現であり同じ関係の二つの側面だということを明らかにせんとしているものであって、その限りではそれが循環論だと非難されるいわれはない。もっとも、この『草稿』では、両者の本源的な歴史的発生関係の究明がないこと、あるいは、労働に基づく「私的所有」の発生が生産力と生産関係という概念を「媒介」にして解明されていないことも確かである。しかし、この断片の最後近くではつぎのようにのべられている。

「われわれは労働の疎外を……一つの事実としてうけとり、そして、この事実を分析したのであった。そこでわれわれは問おうとする。どのようにして人間は自分の労働を外化するようになるのか、どのようにしてこの疎外は、人間的発展の本質のうちに基礎づけられるのか」(P.105)。

この問の具体的究明は、現存『草稿』にはみあたらない。しかし、この問につづいて、「われわれはすでに、私的所有の起源に関する問題を、人類の発展行程に対する外化された労働の関係という問題におきかえることによって、この課題を解決するために多くのものを獲得してきた。……この新しい問題提起は、すでにその解決をふくんでいる」(P.105) という叙述がある。これまでの概観や他の部分（たとえば、P.141—143, P.168—176）に基づけば、右の叙述では、この課題が労働における「人間的な本質諸力の展開」(P.142) として、換言すれば分業、産業の歴史を基本にして究明しようという意図が示されているといえよう。そしてその一つの成果が『ドイツ・イデオロギー』における分業を軸とした歴史的考察部分にほかならないと考えられる。

それゆえ、断片「疎外された労働」に歴史的発生関係の究明がないという理由で、それを循環論に終始するものと評価するならばそれも一面的評価といわねばならない。

(30) "Die Deutsche Ideologie, Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten, Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutscuen Sozialismus in Seinen verschiedenen Proheten 1845—1846." 一九六五年にソ連のM・L研究所は、「第一章」の新しいテキストを発表したが、そこにはこれまでのテキストには未発表の原稿が入っている。その邦訳は、『新版ドイツ・イデオロギー』（花崎皋平訳〈合同出版社〉）におさめられており、本稿でも引用にさいしては、この『新版』にふくまれている部分はすべてここから行ない、他の部分は全集版（邦訳大月書店）第三巻から行なうこと

にする。

(31) この種の見解は、ソヴェトの新進哲学者といわれているダヴィドフ（Ю. Н. Давыдов）をはじめ、わが国では清水正徳、広松渉氏らによって主張されている（ちなみに、広松渉氏は新版『ドイツ・イデオロギー』を武器にしてこの種の主張を展開され、いわゆる「新左翼」の学生たちの一部にある程度の影響を与えているようである）。右の見解を新版『ドイツ・イデオロギー』にもとづいて検討したものは少ないようなので、ここで簡単に検討を加えておくのも無駄ではあるまい。そこで右の見解の代表者と目されるダヴィドフをとりあげることにしよう。

「彼（マルクス――引用者）の研究はただ、労働がその『本性』上どういう性質のものであらねばならぬか、そして労働者の自分の労働に対する『正常な』関係がどういう関係であらねばならぬかということの、すでに形成された理想を、彼がもともとはじめから彼の分析の念頭に置いているからこそ、可能なのである。しかしながら、問題の本質はまさに、『疎外されていない』労働の理想像を、具体的な個人たち相互の実在的な諸関係の分析に先立って置くよりまえに、それら具体的個人たちの実在的諸関係から『労働の疎外』という事実をみちびき出すことに存した」（"Труд и свобода" 1962, 藤野渉訳〈青木書店〉、『自由と疎外』, P.82)。

以下、もう少し彼の主張をみることにしよう。

「マルクスは『ドイツ・イデオロギー』において、まさに人間の『正常な』本性というこの表象を決定的な批判にかけた」（前掲。P.84)。「マルクスは初期の諸著作においては、フォイエルバッハ的な『人間』のかわりに、『労働する人間』、『労働』を定立していたのであった。そして人類の全歴史は、この『正常な』労働（それは経験的には事実上まだ歴史のなかでどんな場所も占めたことはなかった）の自己疎外、外化の歴史となったのであった。したがって労働の『疎外』は、労働の理想の疎外……であることが明らかになったのであった」（同、P.85)。

ダヴィドフは、自己の見解を証明するために『ドイツ・イデオロギー』のつぎの叙述をもちだし、それが右でダヴィドフが指摘したマルクスにおける「誤謬」の「自己批判」を表明するものにほかならないという。

「もはや分業のもとへ服属させられない諸個人を、哲学者たちは、《人間》[der Mensch] の名のもとに、理想として表象してきた。そしてわれわれが、これまで展開してきた全過程を、《人間》の発展過程としてとらえた。そのため、《人間》が、これまでの各歴史的段階における諸個人のかわりにおかれ、それこそが歴史の推進力だ、としてえがきだされた。それゆえ、

全過程が、《人間》の自己疎外の過程としてとらえられていた。こうしたことが生じたのは、本質的には、後代の平均的個人が、いつも前代に密輸入されたり、後代の意識が前代の個人につぎ木されていたからにほかならない。そもそも始めから、現実的諸条件を捨象しているこのような逆立ちによって、歴史全体を意識の発展過程に変えることが可能であったわけである」（新版『ドイツ・イデオロギー』、花崎皋平訳、〈合同出版〉、P.162）。

ダヴィドフによると、四三年以前だけでなく、四四年の『草稿』におけるマルクスも右の「哲学者たち」と同じ誤りを犯していたのであり、右の叙述はその自己批判を表明したものなのである（前掲書、P.85）。だがはたしてそうであろうか？　右の叙述と同じ観点ないし同じ主旨がのべられている他の叙述を『ドイツ・イデオロギー』から三つばかりとりだしてみよう。

①「この諸個人の発展を、歴史的にあいついで生ずる諸身分と諸階級に共通な存在諸条件において、およびかれらにその諸条件といっしょに押しつけられた普遍的諸観念においてみる、つまり哲学的にみるとすれば、この諸個人のなかで、類なるものとか人間なるものとかが自己を展開したとか、諸個人が人間なるものを展開したのだとか、思いえがくことはもちろんわけなくできる。そうした想像は、歴史にしたたか往復びんたをくわすようなものだが」（同、P.136）。

②「われわれの見いだしたように、ドイツ哲学の諸幻想によせる『シュティルナー』の際限のない篤信が集中されているのは、彼がしょっちゅう、歴史には唯一の行為する主体（ペルソン）として『人間なるもの』がいると誣（シ）い、『人間なるもの』が歴史をつくってきたと信じつづけている点である。われわれはこれを今度はさらにフォイエルバッハの場合にも見いだすであろう」（M. E. Werke, B. 3, S. 216, 訳、P.234—P.235）。

③「歴史においては、つねに思想が支配するのだという結論ができあがってしまえば、これらさまざまな思想から、《思想そのもの》、理念、等々を歴史における支配者として描きだし、つぎにすべてこのような個々の思想と概念とを、歴史のうちで自己展開する概念そのものの《自己規定》としてとらえることはいとも容易である。そうなれば、人間たちの全関係が人間の概念から、表象された人間から、人間の本質から、人間なるものから描き出されるのもけだし当然である。こういうふうにやったのが思弁哲学であった」（前掲書、P.100）。

みられるように、これらの叙述も前述の叙述と同様「哲学者たち」を批判するためのものである。ダヴィドフにしたがえば、マルクスはこれらの叙述で「哲学者たち」を根本から批判する刀で『草稿』の自分をも批判しているのだということになる。

右の三つの引用文で示されている「哲学たち」の観念論的な人間観＝歴史観を批判する基本的立場は、『経済学・哲学草稿』以前の諸労作においてもすでに「示唆され」たり、明示されていた。ただ、以前の諸叙述では、観念論的な人間の批判が「哲学的な表現」で書かれていたので誤解をまねきやすい面があったのは確かである。この事実は、『ドイツ・イデオロギー』でマルクス自身がつぎのようにのべているとおりである。

「唯物論的な世界の見方への道……。この進路はすでに『独仏年誌』のなかで、『ヘーゲル法哲学批判への序説』、『ユダヤ人問題によせて』において示唆されていた。だがこれは当時まだ哲学的な慣用語法でおこなわれていたので、ここに伝統的にまぎれこんでいる哲学的な表現、『人間的本質』とか『類』とか等々のことばが、ドイツの理論家たちに、彼らが現実的な展開を誤解して、ここでもまた問題はただ彼らの着古した理論的上着を新しく裏返しすることだと信じるのに好都合なきっかけを与えた」(M. E. Werke, B. 3, S. 217—218, 訳、P. 236—237)。

「〔現実的諸関係への——訳者〕全面的な依存、この諸個人の世界史的協力の自然成長的形態は、この共産主義革命によって、これら諸力、すなわち、人間たちの相互作用からうみだされたものでありながら、従来まったく疎遠な力としてかれらにのぞみ、かれらを支配してきた力の、制御と意識的支配へとかえられる。このみかたは、ところでまた《類の自己産出》(……)として、思弁的観念論的に、すなわち、空想的にうけとられるおそれもある。そしてその結果、相互に関係しあっている諸個人、継起的に交代してゆく系列、が自己自身を産出する秘蹟をおこなう唯一の個人として思いうかべられるおそれもある。なるほど、諸個人は、身体的にも精神的にも相互につくりあいはするが、しかし、自分をつくったりしないことは、ここでは自明なことだ」(前掲「新版」、P.77)。

このようにみてくると、ダヴィドフは右でマルクスが懸念し注意している誤解を犯したうえで、それにもとづいてマルクスの「労働疎外」論を批判しているように思われる。『経済学・哲学草稿』におけるつぎの諸叙述は、この点をたしかめる材料になる。

「国民経済学者が説明しようと思うときにするように、ある架空の原始状態にわが身をおくようなことは、われわれはしない。このような原始状態は、なにごとをも説明しない。それはただたんに問題を、ある灰色の、霧のかかったかなたに追いやるだけなのである。……われわれは国民経済学上の現に存在する事実から出発する」(P.86)。

「『社会』をふたたび抽象物として個人に対立させて固定することは、なによりもまず避けるべきである。個人は社会的存

在である」(P.134)。

「産業は、人間に対する自然の、したがって自然科学の現実的な歴史的関係である」(P.142)。「産業の歴史と産業の生成しおわった対象的現存とが、人間的な本質諸力の開かれた書物であり、感性的に提示されている人間的な心理学であることは明らかである」。ひとは「人間の一般的な現存だけを、つまり宗教を、あるいは歴史を、その抽象的＝一般的本質において、政治、芸術、文学等々として人間的本質諸力の現実として、また人間的な類的行為としてとらえることしか知らなかった……」(P.141)。「宗教、家族、国家、法律、道徳、科学、芸術等々は、生産の特殊なあり方にすぎず、生産の一般的法則に服する」(P.132)。

弁証法的な唯物論的な世界観はすでに『経・哲草稿』以前にもある程度示されているが、『草稿』においては、右のごとく、「人間なるもの」の抽象的把握が批判され、「現実的労働」を本質とする「社会的存在」としての個人という把握が示され、しかも彼らの活動が「産業の歴史」として、すべての社会経済現象が「生産の特殊なあり方」としておさえられはじめているのであり、またさらに、「疎外された労働」や「私的所有」が歴史的にどのように生じてくるのかが問われているのである。

それゆえ、ダヴィドフと同じく、もしマルクスが以上のような見地にたちながらその同じ時期、同じ場所で「人間なるもの」の「観念的理想像」や「労働の理想像」を先験的に設定しているのだと主張しようと試みることは、マルクスを二枚舌使いか分裂症患者として描かぬかぎり無理だといわざるをえない。

たしかに『草稿』では、ヘーゲルやフォイエルバッハと同じ「哲学的表現」が用いられているが、その意味内容、基本的観点は彼らのそれとは相異っているのであって、たとえばフォイエルバッハと同じ「類的存在」という概念も、類を類たらしめる契機はフォイエルバッハのように愛ではなく自由で意識的な現実の労働に求められ、かかる労働を通じて相互に産出しあう社会的存在としての人間をあらわす概念として用いられている。また労働の把握にしても、たとえ不十分な面があるにせよ、だからといってそれが現実的労働に基づかぬ単なる観念上の産物、「理想像」だとはいえない。それは「市民社会」の現実的労働がもっている一つの特質の客観的抽象（そこには「古典派経済学」にみられる労働に関する客観的な抽象の継承も含まれる）である。このことは、「労働一般」、「労働」という「近代経済学が先頭に立てている最も簡単な抽象そしてすべての社会形態にあてはまる非常に古い関係を表わしている最も簡単な抽象」が、「やはり歴史的諸関係の産物」なるがゆえに、古典派経済学において初めて把握されえたのだという周知の『経済学批判要綱序説』の主張を想起してみても明瞭であろう。

それゆえ、ダヴィドフの「労働疎外」論の批判は、客観的抽象とそれに基づく考察を単なる観念的理想像による論理の自己展開と混同した結果といわざるをえない。そして彼がこうした混同を犯したのは、当時の考察が充分な経済史的研究を欠いていたこと、従来までの伝統的哲学的概念が用いられていたこと、これらの点が『ドイツ・イデオロギー』で反省されていること等々をもって、その考察そのものが「哲学」上の産物だと誤解してしまったからであろう。だがそれでは、『資本論』における「労働過程」の考察や「全面的に発達した個人」の論及も同様に、ありもしないそれらの「理想像」によるものとして非難されねばなりかねないであろう。

なお、以上からすれば、マンデルの見解――断片「疎外された労働」における「類からの疎外」に関する箇所（訳、P.94―97 参照）は、「疎外された労働の起源が自然そのもののうちに求められ」ている点で、それまでの思考が分裂し、「疎外された労働が《類的人間》の諸特質と対立させられ、……かつて実在したことのなかった《理想的人間》の否定として」疎外が理解されているというマンデルの見解（マンデル『カール・マルクス』〈河出書房〉山内昶・表三郎訳、P.22）も、以上と同じ誤りを犯していると考えざるをえない。

さて、これまでの考察からみる限りでも、当時の「労働疎外」論の一大特質が浮び上ってくるのであって、それはさしあたりつぎのように要約することができる（ただしその最終的な特徴づけは、本稿第三章にまたねばならない）。

当時の「労働疎外」論は、「市民社会」における「国民経済的諸事実」や諸範疇を、労働主体の側からする人間的労働のありかたという視角から追求し、その転倒したありかたを「疎外された労働」としてとらえつつ、事実上で商品および資本家的生産に内在する敵対的性格を浮き彫りにしたものであり、また、労働者の窮乏を始めとする現存社会のすべての矛盾の根源を私的所有と「疎外された労働」に（事実上での商品および資本家的関係に）求め、プロレタリアートによるその止揚すなわち彼らによる共産主義実現の理論的根拠を提供せんとしたものである。それは、古典派経済学の研究なかんずくエンゲルスの古典派経済学批判に学びつつ、従来までの彼（マルクス）の哲学的研究の

成果たる弁証法的方法と唯物論的見地をば、「市民社会」における経済研究および経済学批判へ適用した成果であり、したがってまた、『草稿』はイギリス古典派経済学、ドイツ古典哲学、フランス社会主義という「マルクス主義の三つの源泉」を批判的に摂取しつつこれを融合し、マルクス主義理論を確立せんとする最初の貴重な成果だということができる。(32)

それゆえ、右の「労働疎外」論がマルクス主義理論の発展においてどのような位置を占めるか――とりわけ、『資本論』とどのような関連にあるのか――を究明するためには、労働主体の側からする人間的労働のありかた如何という視角にたった商品および資本家的生産の敵対的性格に関する初期「労働疎外」論の把握が、以後の諸労作とりわけ『資本論』でどのように展開されているかを正しく考究することを基本にせねばならない。われわれはその考究を次章以下でおこなうことにしよう。

(32) 労働主体の側からする人間的労働の転倒したありかたという視角を一応別にすれば、以上の評価は多かれ少なかれ幾人かの先学によって示されている。たとえば、杉原四郎氏は、『経・哲草稿』は「レーニンのいわゆるマルクス主義の三つの源泉……が青年マルクスの強烈な学問的情熱のつるぼのなかで融合せしめられながら、新思想体系の原型を生みだしてゆく過程を示すもの」であり、「労働疎外論」はその「理論的中核をなすもの」とされている（未来社刊、『マルクス経済学への道』、P. 92）。これら先学による初期「労働疎外」論の評価については、いずれ第三章で検討するであろう。

昭和四十六年五月十九日（未完）